

レイモンド・カーヴァーの「大聖堂」を授業で読む

宮 本 文

群馬大学教育学部英語教育講座

Reading Raymond Carver's "Cathedral" in the Classrooms

Aya MIYAMOTO

Department of English Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：文学、アメリカ、英語、グループ・ディスカッション、アクティブ・ラーニング

Keywords : literature, America, English, group discussion, active learning

(2017年8月31日受理)

はじめに

2014年度から2016年度にかけて、年一回「アメリカ現代小説を読む」というタイトルで教員免許更新講習を行なった。主にレイモンド・カーヴァー (Raymond Carver, 1938-1988) の短編小説「大聖堂」(“Cathedral,” 1981) を素材とし、文脈を意識した英語テキストの精読を通して総合的な英語力を向上することを目標とした。また、グループ・ディスカッションなどアクティブ・ラーニング的なタスクを通して、通常は教える側の教員が学ぶ側に立ち、学ぶ面白さを体験してもらえようという授業づくりを目指した。2014年度から2016年度にかけて毎年、マイナーチェンジを重ねて来たが、本稿では主として2016年度の試みについて論じていく。

まずは、講習のアウトラインを説明したい。事前の課題として村上春樹編訳の『カーヴァーズ・ダズン』をテキストに指定し、そのなかの「大聖堂」と「ぼくが電話をかけている場所」(“Where I'm Calling From,” 1982) の日本語訳を読んてくることを課した。「大聖堂」と「ぼくが電話をかけている場所」の2作品を指定したのは、複数の作品からカーヴァーの作風や手触りを知ってもらうためであったが、実際の授業

では時間の制約もあり、後者に適宜言及しつつも精読やディスカッションは「大聖堂」に絞った。なお、英語で書かれた原文テキストは当日に配布する旨をシラバスに掲載し、講習当日は受講者が原文テキストを初めて読むという前提に立ち授業を進めた。

講習は一日6時間で行い、オリエンテーションで授業の概要を説明した後、1時間目の前半では、講師(筆者)、受講者がそれぞれ自己紹介を行った。ウォームアップとして1時間目の後半では、カーヴァーの伝記的な概要とアメリカ文学史におけるカーヴァーの位置づけを確認し、次にカーヴァー作品の全般的な手触りを掴むためにいくつかカーヴァー論を紹介した。2・3時間目では、原文テキストを参照しながら講師が用意した論点に沿って「大聖堂」を読んでいった。4時間目から5時間目の前半にかけてグループ・ディスカッションとグループ発表を行い、5時間目の後半には一人ひとりに講座を受講した感想を自由に述べてもらった。6時間目には試験を行った。

2016年度のシラバス掲載の概要は以下の通りである。

レイモンド・カーヴァーの短編「大聖堂」および「ぼくが電話をかけている場所」を精読する。授

業では、文学作品に感じる「わからない」という居心地悪さこそコミュニケーションの出発点であり、完全に同じ「正解」を共有せずとも理解に近づく契機になることを提示したい。すなわち文学作品（テキスト）を読む行為は、人間（生徒）と対面し理解しようと努めることに喩えられ、その困難さと喜びを改めて味わうことが期待される。

「わからない」ことに着目したのは、文学テキストの読解にはよく正解がないと言われるからである。実際に筆者が通常担当する大学の文学の授業でも、文学が嫌いという学生が一定数おり、その理由を聞いてみると「文学はよくわからない」、「正解がないから好きじゃない」という答えが返ってくる。確かに文学は「わからない」ことや、「正解がない」ことを積極的に呼び込む性質がある。しかしながら、「わからなさ」がつきまったり、正解がなかったりすることは何も文学作品だけに特有な現象ではない。むしろ、他者とのかわり合いやコミュニケーションの基本形であると言えよう。例えば、同じ発話であっても話者によって、更には話者の置かれている状況によって、その意図するところが変わるだろう。また、同じ状況に居合わせた人々が異なった形でその状況を解釈していることの方が普通であるのだ。私たちの日常は正解があらかじめ決められている方がまれであり、むしろ曖昧で正解のないことの方が多いため、私たちはコミュニケーションを必要とするのである。

文学テキストはこの「わからなさ」を前景化するのが得意である。複数の人間が同じ文学テキストを読みそれを巡って意見を交わす文学の授業では、みんなが同じ解釈をすることはまずなく、ほぼすべての場合において多種多様な、時に正反対の解釈が提示される。文学の授業におけるグループ・ディスカッションの面白さは、まさにこの「わからなさ」、「わかりあえなさ」にあり、「正解」を完全には共有できないにも関わらず、他者（テキスト）の理解がわずかにでも深まる場所にある。とりわけ、カーヴァーの「大聖堂」はこの「わからなさ」をめぐる物語であり、最終的に「わからなさ」に対して自らを晒すことへの喜びで終わる仕掛けになっているため、文学テキストの「わからなさ」を面白がる訓練には格好の素材である。

本稿では、前半に「大聖堂」のあらすじを紹介した

後、作品が授業の素材としてどのような「強み」を持っているのか検討する。また、後半では2016年度の講習でどのように「大聖堂」を用いて授業を行ったのか説明する。

「大聖堂」のあらすじ

ある日、妻の古い友人である盲目の男ロバートが語り手の家に泊りにやってくる。昔、妻はロバートの元で本を読み上げる仕事をひと夏したことがあった。それ以来、二人は声を吹き込んだテープをやりとりし、何でも話す友人になった。そのため、妻の前の結婚やその破綻、自殺未遂、そして現在の夫である語り手のことまでロバートは知っている。語り手はそんなロバートのことを快く思っておらず、くさすようなことを言っただけで妻の不興を買ってしまう。

実際にロバートがやってくると、それまで盲人に抱いていたイメージと彼がことごとく異なることに語り手は戸惑う。妻がロバートに甲斐甲斐しくするのを苦々しく思いながら、語り手はロバートに対して失礼な言動を繰り返すが、そのたびにロバートは失礼とせず、逆に話を膨らませてスマートに答える。ロバートは社交性を必要とするマルチビジネスの仕事で稼ぎ、趣味の無線通信で世界中に友達がいることが判明する。その一方で、語り手は惰性で働き、趣味もなく、友達もおらず、自分について話すことがあまりないことに気づく。

すっかり打ちのめされた語り手はリビングにロバートと二人きりになったとき、なりゆきで彼にマリファナをすすめる。マリファナを吸ったことがないロバートであったが、何にでも初めてがあると言って一緒に吸うことにする。リビングに戻ってきた妻は語り手に怒りを露わにするが、ロバートは初めての体験を楽しんでいる。

やがて、妻が先に寝て、再び二人きりになり一緒にテレビを見る。教会や中世についての番組しかないと語り手が謝ると、ロバートは「私は構わないから。私はいつも何かを学び取ろうとしてるんだ。学ぶことには終わりってものがないからね。今晚何かを学ぶのもわるくはないよ」¹と答える。画面には、世界各地の「大聖堂」が映し出される。ふと語り手は大聖堂がどのようなものかロバートがわかっているかどうか知

りたくなり質問する。すると逆に大聖堂がどのようなものか描写するように頼まれる。語り手は真摯に説明しようとするが、いざしようとするに難しいことに気づく。そこでロバートは一緒に大聖堂の絵を描いてみようという提案をする。ロバートは自分の手を語り手の手に重ね、語り手を励まし続ける。それに応えるように語り手は一つひとつ大聖堂の細部を懸命に描いていく。起きてきた妻は二人の姿を見て、何をしているか尋ねるが二人は描き続ける。ロバートは語り手に、目を閉じて更に描くように導く。語り手は今まで味わったことのない感覚を得る。描き終え、「目を開けていい」と言われても、語り手は目を閉じたままその感覚を味わっている。

授業の素材としての「大聖堂」の強み

「大聖堂」は既知の世界の殻を破り、未知の世界へと踏み出す物語である。語り手は既知の知識で世界を認識することで生き延びてきたタイプの人間であり、予め抱いている盲人のイメージを武器として、未知の存在であり脅威でもあるロバートを制圧しようとする。しかしながら、ロバートの前で、既知の知識はことごとく無効なものとなり、逆に既知の知識のなかで身動きがとれず一人ぼっちで苦しんでいる語り手の姿が顕在化する。後半ではロバートが導き手となり、語り手は大聖堂のことを目で見ていたので知っていると思いついでいたが実は知らなかったことに気づく。そしてこの気づきを契機として、語り手は未知の世界に身を晒し開放感を得る。すなわち、「大聖堂」は未知のものを学ぶ喜び、もっと言えば、未知のものを未知だと気づく勇気についての物語なのである。

「大聖堂」の強みは、このような物語の特性がグループ・ディスカッションでの気づきのプロセスや喜びと相似形を成しているところにある。語り手にとって、未知の存在は既知の世界を脅かす恐怖でしかないように、私たちにとっても知らないこと、わからないことは往々にして苦痛をもたらすものであり、学校現場では「わからない」と言うことは恥だとされることが多い。しかしながら、先にも述べたとおり、「わからなさ」こそ他者とのコミュニケーションを促し、学ぶ契機となるのである。とりわけ教員は「知っている」ことを期待される職業であり、語り手と同じぐらい既知の領

域に留まることを無意識のうちに自分に課す傾向がある。従って、既知の世界から未知へと向かう語り手の軌跡を追体験することが、「わからなさ」を楽しむにはうってつけの準備運動になるのである。

教員が既知の殻を破り未知の世界へ身を晒すには、一方的に説明し知識を授けるよう授業スタイルではなく、グループ・ディスカッションのようなアクティブ・ラーニングが適している。グループ・ディスカッションの楽しさを教員が身をもって体験するには、やはり教員自身が、答えを持っていなければならないという呪縛から解き放たれて「わからなさ」に対して開かなければならない。その武装解除に「大聖堂」の物語を読むことは大いに役に立つのだ。実際に講習の感想で多かったのは、精読やグループ・ディスカッションを通して、「人によって考えることがこれほどまでに考えが違うのだと知って面白かった」、また「一人で読んでいては気づかない点がたくさんあって面白かった」というものであった。

また「大聖堂」の精読には、文法事項の学習やボキャブラリーの増強、パラグラフ・リーディングによる読解といった通常のリーディングに期待されることを超えて、総合的な英語力を涵養できるという強みもある。例えば、語り手の発話は文字通りの意味だけでなく、語りのトーンや文脈から語り手の意識や無意識を推し量りながら、受け止めなければならない。このことは文学が説明的な言語で書かれていないことに由来する文学全般の強みだとも言える。すなわち、曖昧さ、わからなさ、ディスコミュニケーション、解釈の余地などを含む文学の言語は、私たちが普段行っているコミュニケーションの言語に似ているのである。とりわけ、感情を露呈させつつも露呈させていることを気づいていない語り手の語りは、言葉そのままに受け止めてはならないことが見えやすいのである。従って、英語原文テキストでの「大聖堂」の精読は、英語で行われる高度なコミュニケーションの訓練となるのである。

授業での取り組み (1) ウォーミングアップ

ここからは実際の授業の取り組みを紹介していくことにする。1時間目の前半では自己紹介を行った。講師が通常担当する大学の授業で、文学テキストがどの

ように用いられているのか説明し、グループ・ディスカッションを促すための工夫を失敗例・成功例の両方を交えて話した。また、受講生には一人ひとりのバックグラウンド（教員歴や学校の種類）やこの授業に期待すること、また「大聖堂」を読んできた感想を簡単に述べてもらった。

感想を述べてもらう前に、「わからない」、「面白くない」という感想も大歓迎であることを強調し、正直に実感を述べてもらえるように意識的にハードルを下げた。こうすることによって、本講習において「わからない」ことが決してネガティブなことではないというメッセージを行き渡らせることができた。また、当初の読みが精読やグループ・ディスカッションを経ることによって、どのように変わっていくか後で振り返ったときに意識しやすくなった。実際に受講者の半数以上が「大聖堂」について、「わからなかった」、「面白くなかった」、「苦手」といったネガティブな感想を述べた。加えて、文学テキストの読みにおいて、「わからない」、「面白くない」、「嫌い」といったことでも、その理由をうまく探り当てて言語化するようにすれば、生産的な読解になることも併せて伝えた。

1時間目の後半ではカーヴァーの伝記的概要およびアメリカ文学史におけるカーヴァーの位置づけを確認し、併せて、カーヴァー作品全般のパターンや手触りを確認した。カーヴァーの伝記的概要については、『アメリカ文学史入門』のカーヴァーの項目をコピーして配布した。見開き1ページに収まり、かつバランスの取れた説明がなされている。

また、アメリカ文学史におけるカーヴァーの位置づけについても、同書の「第1部 アメリカ文学の歴史」のなかの「5 第二次世界大戦後から冷戦終結まで(1945-1990)」のコピーを配布し、カーヴァー登場前後のアメリカの歴史と文学史の両方を確認した。1960年代全盛だった主に白人男性が書き手のポストモダンの時代が終わり、1970年代終わりから80年代にかけて台頭してきた多文化主義がますます大勢を占めるなか、白人男性がもっとも声をあげにくかった時代にカーヴァー（白人男性）が出てきたことを説明した。カーヴァー作品の主人公のほとんどが、閉塞感に苛まれパブリックな主張もそれを届ける声も持たないブルーカラーの白人男性（すなわち、カーヴァーの境遇を反映した人物）であり、「大聖堂」の語り手の声も

また、しばしば、リベラルな妻の声に遮られる。

カーヴァー作品のパターンを確認するにあたり、『世界×現在×文学—作家ファイル』所収の平石のカーヴァー論を配布した。² 平石はカーヴァーの真骨頂ともいべきカーヴァー作品特有のパターンを「飛躍」という言葉で説明する。

カーヴァーの場合、現実的な場面を書いていながら、作者自身にもかならずしも理解しえないある「飛躍」に到達することによって物語のクライマックスをなす手法にみちびかれる場合が多い（中略）ふとした出来事が、人間たちに人生の認識を、ほんやりとではあるがかいま見せる。こうした「飛躍」を待ちながらカーヴァーは、また彼の読者は、じっくりと人物たちの一挙手一投足を観察し続ける。（中略）かれの人物たちには上記の意味での「目標」がないから、かれらの物語がどこへどのように進むのか検討がつきにくいし、「飛躍」がおとずれたとしても、それがかれらに決定的な「目標」をあたえるわけでもない。それはせいぜい一つの認識、一つの選択をほのめかすにすぎず、それらさえも永続する保証はない。こうした物語進行が、カーヴァーが発見した小説のかたちである。（84）

「大聖堂」においても、平石が言う「飛躍」が最後の瞬間に起きていけると言えるだろう。但し、平石の文章は決定的な意味をカーヴァー作品に付与し、（とりわけカーヴァー作品にあまり馴染みのない）読者に抗いがたい先入観を与えるような説明的な文章ではない。あくまでもカーヴァー作品の手触りを感触のままに伝えようとする文章である。ここでのねらいは、カーヴァー作品の全般的なパターンや感触を（正解としてではなく）おぼろげにつかみ、後のディスカッションで受講者から意見を引き出しやすくすることにある。

授業での取り組み (2) 「大聖堂」精読

2時間目、3時間目を使って「大聖堂」の精読を行った。受講者は事前に日本語訳で読んできているので、主に原文テキストを筆者が用意した論点に沿って読んでいった。こちらで一方向的に説明するのではなく、適

宜、受講者に質問を振り、意見を述べてもらった。

以下の論点に従って精読を行った。(受講者にはプリントを配布した。)³

1. “The blind man/ Robert” はどのように語り手の人生に侵入してくるのか(既に侵入しているのか)。
 - 1-1 書き出し
“This blind man, an old friend of my wife’s, he was on his way to spend night. [...]” (209)
 - 1-2 Robertと妻のテーブルのやりとりに語り手の名前が登場する時 (212)
 - 1-3 実際に語り手がロバートに初めて会う時 (214)
2. 挿入句について
 - 2-1 語り手によるダッシュで囲まれたコメント的な挿入や、1語程度の短い挿入句から、(1) どのようなトーンで語っているのか、(2) ロバートや妻に対する感情について考えてみよう。
 - 2-2 “Creepy” (216) は2-1で確認した挿入句と同じ性質なのだろうか。
3. 語り手があらかじめ考えていた “a blind man” と、実際のRobertとの違い(期待の裏切り方)について話してみよう。
4. 列車のどちら側に座ったか (215) といった語り手の攻撃的ともとれる質問に対して、Robertはどのように答えているか。
5. Robertの暮らしぶりと語り手の暮らしぶり (218)
6. 食事のシーン (217) について
7. 夫婦関係について、以下の点から考えてみよう。
 - 7-1 妻にとって顔を触られる体験の意味 (210)
 - 7-2 妻にとっての詩を作る行為 (210) と語り手にとって「大聖堂」を描く行為 (226-8) は同じか。
 - 7-3 妻のRobertに対する接し方と語り手のRobert

への接し方に対する妻の反応

7-4 語り手に対する妻の接し方

ここからは、いくつかの論点に絞りどのように精読を実践したか説明していく。まず、書き出し (1-1) について、受講者に違和感を覚えないか質問することから始めた。⁴ 受講者からは、“this” は通常、既に出た話題について使うものなので、普通は “an old friend of my wife’s” が先に来るはずではないかといった意見が出た。この違和感を更に掘り下げることにした。“This blind man” と聞き手が当然知っているかのような身振りで語り手は話し始めるが、すぐに “an old friend of my wife’s” と言い直すことから、語り手はあまり周りの了解を得ずにせっかちに話しだす癖があるのかもしれない。もしくは「妻の古い友人」というニュートラルな情報に先立って、きわめてセンシティブな(語り手にとってはネガティブな価値を含む)「盲人」という情報が “this” という身振りとともに乱暴に投げ出されることから、“this blind man” に対する語り手の敵意や攻撃性を感じ取ってもいいのかもしれない。

実際に出会う前から、ロバートはネガティブな感情を惹起させる異物として語り手の生活に侵入している様子が、1-2の場面を読むともう少しはっきりしてくる。ここでは妻が夫である語り手のことをすべてロバートに話していることを、しかしながら、その内容を語り手は知らないことが明らかになる。そして語り手にも触れているテーブルのやりとりを妻が聞かせようとする。夫婦のプライベートな空間に、見知らぬロバートの声が二人の間を割って侵入してくるのだ。妻にとってはロバートもその話す内容も既知のものであるが、語り手にとっては未知のものであり、妻と自分の間を邪魔するものでしかない。また、ロバートの口から出るであろう語り手に対する評価は、妻由来のものであるはずだから語り手は聞くが怖い。書き出しからにじませている敵意には、嫉妬や恐怖や自信のなさといった感情が混じり合っていることがわかるのだ。

そんな語り手はロバートを名前で呼ばずに “the blind man” と呼び続け、既にある盲人のイメージをまだ見ぬロバートに押し付けることによって、ロバートに対して抱く恐怖を抑えようとする。その既知の盲人のイメージがことごとく裏切られ、語り手の作戦が

失敗し、ロバートが未知で得体の知れない存在として語り手の実際の生活に侵入してくるのが1-3の場面である。

2の挿入句について、妻から聞いたロバートの話を語りながら、語り手はいちいち、“[p]athetic” (214)、“[t]oo much” (214)、“[c]razy” (214)といった一言で上から切り捨てて、ロバートより優位に立っているのだとアピールする。しかしながら、別の角度から見れば、妻がロバートの話をするのが面白くなくて嫉妬心が抑えられず噴出しているとも読める。

また、以下の引用は妻がロバートとその妻について語った言葉を語り手が語り直しているところである。“After they had been inseparable for eight years—my wife’s word, inseparable—Beulah’s health went into a rapid decline.” (213) ダッシュで囲まれた挿入部分は、妻がロバートとその妻ビューラの関係を評していった“inseparable”という言葉に対して、うさんくさいとばかりに嘯み付いているのだ。先に示した、“[p]athetic”、“[t]oo much”、“[c]razy”といったコメントと同様、上から切って捨てようとしているのだが、同時に、語り手と妻の関係が決して“inseparable”ないこと、それにも関わらず妻が他のカップルにそのような言葉を使うことに傷ついているように聞こえる。すなわち、攻撃的であると同時に弱さを露呈させているのである。この部分は、7の夫婦関係についての論点とリンクさせながら精読した。

4について、語り手はハドソン川沿いの鉄道に乗る際には風景を楽しむために川側の席に座るべきだと思っている。汽車旅をしてきたロバートに、“[w]hich side of the train did you sit on, by the way?” (215)と尋ねる。しかしながら、盲人のロバートは景色が見えない。妻はすぐさま、“[w]hat a question, which side!” (215)と語り手をとがめる。すると、ロバートは以下のようにきちんと受け答えした上で、更に話を広げて見せるのである。

“Right side,” the blind man said. “I hadn’t been on a train in nearly forty years. Not since I was a kid. With my folks. That’s been a long time. I’d nearly forgotten the sensation. I have winter in my beard now,” he said. (215)

ここでは、スマートで社会的で新しいことに対して開かれたロバートの性質がよく表れている。一方、このロバートの受け答えによって、盲人であることにつけて込んで優位に立とうとする語り手の試みはくじかれる。また、妻の反応もロバートのスマートさの前では、過剰な気遣いに見えてしまう。⁵

真摯に答え情報を付け足して話を広げるコミュニケーションのスタイルは、語り手のそれとは正反対であり、このスタイルの対比から二人の対照的な暮らしぶりが見えてくる。これが5の論点である。ロバートの方はコミュニケーションのスタイル同様、ビジネスでもプライベートでもその社交性を大いに発揮して充実した人生を送っている。それに対して語り手は自分に対する質問には、一問一答でしか答えることができず、しまいにはテレビに逃げ込んでしまう。

From time to time, he’d turn his blind face toward me, put his hand under his beard, ask me something. How long had I been in my present position? (Three years.) Did I like my work? (I didn’t.) Was I going to stay with it? (What were the options?) Finally, when I thought he was beginning to run down, I got up and turned on the TV. (218)

短い返答で終わってしまうのは、ロバートに対して敵意の満ちた拒否の意志表示をしているわけではない。語り手の生活が惰性と無力感しかないことの結果なのである。現状に対して満足していないものの、それを変えるだけの勇気も力もないことを、語り手は恥じているのである。語り手は自分が語ることのない人間であることをここで意識する。痛みを伴う場面でもある。1や2における攻撃的な語り手が、結局のところ自分を守るための過剰な防衛本能によるものであったことが明らかになってくる。テレビを話のタネにして会話を自然な形で広げようとするロバートに対し、語り手は何も言うことがないことを意識し、ますます口をつぐむようになる。“I didn’t know what to say to that. I had absolutely nothing to say to that. No opinion.” (218))

授業での取り組み (3) グループ・ディスカッション

グループ・ディスカッションに先立ち、グループ分けを行い、いくつか意識して欲しいポイントを述べた。以下が概要である。

- ・ 4 - 5 人程度のグループに分ける。
- ・ ディスカッションに先立ち、それぞれのグループで進行役と書記を決め、進行役には全員が意見を言えるように心配りするよう依頼した。また、グループ・ディスカッションの最後にグループごとに発表を行い、クラス全体で議論をシェアすることを予告した。
- ・ 時間の制約から先にあげた論点を5つ程度に絞った。精読で詳しく扱った論点もいくつか改めてグループ・ディスカッションでとりあげた。その際には、講師の説明に対して違う読みが当然にあり得ること、またをそのような場合には積極的に発表するように促した。
- ・ ディスカッションにあたって意見を出す際に、なるべくテキストの具体的な箇所を根拠としてあげてもらうようにした。そうすることによって、自由に意見を述べることを推奨しつつも、他者の意見（この場合はテキスト）を踏まえて自分の意見を述べるというアカデミックな議論が期待できる。

実際にディスカッションを行っている時間、講師がグループを周り、議論が停滞している場合には論点をパラフレーズして質問を投げかけたり、関わり合いがあると思われるテキストの箇所を示してより具体的なところから出発できるようにサポートした。

以下、精読で触れずにグループ・ディスカッションのために残しておいた論点について記す。まず、2-2の“creepy”について、前時の精読で2-1の他の挿入句を確認したので、比較して論じやすいためディスカッションに組み込んだ。次はこの“creepy”が含まれたパラグラフである。

I've never met, or personally known, anyone who was blind. [...] He also had this full beard. But he didn't use a cane and he didn't wear dark glasses. I'd always thought dark glasses were a must for the blind. Fact was, I wish he had a pair. At first glance, his eyes looked like anyone else's eyes. But

if you looked close, there was something different about them. Too much white in the iris, for one thing, and the pupils seemed to move around in the sockets without his knowing it or being able to stop it. Creepy. (215-6, 下線部宮本)

2-1で取り上げたコメント的な挿入は、概ねのところ一言でロバートを決めつけて切り捨てる身振りであり、ここでもロバートの目を“creepy”（気味が悪い）と切り捨てている。もちろん、目の見えない人に対して非常に侮蔑的な言動である。しかしながら、今までは語り手は「盲人とはこんなものだ」と決めつけて一刀両断して安心しようとしていたのに対して、初めて生身のロバートを認めている場面なのである。くると動くロバートの瞳は、ロバートがもはや語り手の支配下に収まっていないことを告げているようである。語り手はロバートを直接見て、そのつかめなさに自分を漠然と脅かす恐怖を感じたのではないだろうか。そうだとすると、“creepy”という発話は、ロバートの目に対する侮蔑的な攻撃というよりは、ロバートの存在に対して心の底から感じた「得体のしれない気味悪さ」を吐露したものだと言えよう。語り手のなかでも既にこの時点で形勢が逆転しているのである。

障害を持つ人に対する侮蔑的な態度は、政治的に圧倒的に正しくないため、そこで思考停止して語り手を断罪して終わりがちである。しかしながら、ディスカッションでは予め精読によって他の挿入句のトーンを確認していたので、異なる意見が出やすかった。

6の食事のシーンについて、語り手がロバートを牽制しようとして失敗するというそれまでの流れとは異なり、ここでは3人が無言で一心不乱に食事を食べつくすという行為だけで構成されたシーンである。あたかも最後の晩餐のような厳かさを感じると言えるかもしれないが、説明的な言葉は一切なく、他の場面と比べても際立って正解らしき手がかりのない、しかしながら、存在感のあるシーンなのである。このシーンについて、何が起きているのか、なぜこのようなシーンが挿入されているのか、またその効果はといったことを自由にディスカッションしてもらった。

結果、正解がないからこそ、多種多様なイメージや意見が重ねられ、豊かな読みにつながった。一部、例をあげると「視覚を持たないゆえに、それ以外のロバー

トの五感は研ぎ澄まされている。ここでは、五感のなかでも嗅覚や味覚で世界を味わう喜びが感じられる」といった意見や、「ロバートに対してどちらか上かにこだわっていた語り手であったが、皆が等しく食べるという行為に従事する食事のシーンを挟むことにより、この後の関係性の変化をもたらしやすくした」といったものがあった。

結び

6時間目の試験の一部として、「大聖堂」に対する感想を書いてもらった。当初、「大聖堂」に対して半数以上の受講者がネガティブな感想を述べていたが、彼らを含むほぼすべての学生が精読やグループ・ディスカッションを通して、一人で読んだだけでは気づけなかったことに気づき、「大聖堂」に対する感じ方がポジティブに変わったと書いていた。感想をいくつかを紹介してみたい。

事前に英文と村上訳の両方を読んだある受講生は次のように書いている。「一文が短めで、平坦なストーリー展開だという感想を持った。次に村上春樹の訳を流し読みした。ここでも新たな感動は特になかった。しかし、今日、この場に来て発見の多かったことに感動した。自分が内容を理解したと思っていたのは、この主人公と同じで表面、形だけしか見てなかったということだ。作者は意図して、このような文体にし、言葉を選び、物語を作りあげていたという気づきがとても面白かった」。

事前に読んだ時に「居心地の悪さ」を感じたという受講生は、「作品をここまで深く読み込んだことは無かったように思う。グループ作業の良い点を十分に活かした授業だった。同じものを読んでいるのに、感じ方に始まり、気になる箇所やそれに対する考え方も全く異なったりしているのが不思議でもあり新鮮でもあった。そして、ともに考えたり意見を出し合ったりすることで、新しい見方・考え方がうまれてきたりして、本当にいろいろなことに気づかせてもらえた」、「授業を通して、作品に対して感じていた漠然とした嫌悪感のようなものが解消されていることに気づいた」と書いている。

ともに精読すること、グループで話し合うことによって導かれ、一人では得られなかった気づきを体験

したという受講生が多かった。盲人ロバートに対して嫌悪感を抱いていた語り手が、ロバートに導かれるままに（目を閉じながらも）目が啓かれた小説さながらである。

「大聖堂」における導き手でいわば教師の役割を果たす盲人ロバートは、良き教師であると同時に小説を通してずっと良き学び手であり続けた。ロバートは次のように述べる。

“[...] I'm always learning something. Learning never ends. It won't hurt me to learn something tonight. I got ears[.]” (222)

ここから私たちは大きな教訓を得ることができる。すなわち、良き教師は良き学び手なのだ。「わからない」ことを怖れないロバートは、「わからない」ことそのものを楽しみ誰かとともに学ぶ喜びを知っている。だからこそ、語り手を導く教師となれたのである。グループ・ディスカッションがうまくいくときは、それぞれが他者の意見の良き学び手であり、同時に他者を思いもよらない場所に導く教師であるのだ。そのような物語である「大聖堂」に導かれて、本講習が受講生にとって「わからない」ことや「わかりあえない」ことを怖れない「良き学び手であり良き教師」になる訓練となったとすれば幸いである。

注

- 1 村上訳 (176)
- 2 カーヴァーについてより詳しく知ることができる日本語の資料として、この他に『レイ、ほくらと話そう』というカーヴァー論集を紹介した。
- 3 ページ数は原文テキストのもの。
- 4 「大聖堂」の書き出しについて、阿部の論考があることを紹介した。
- 5 但し、語り手が意識的にロバートを攻撃する意図はなかったとも解釈できる。その場合には、「正しくない夫に正しい妻」という構図で常に語り手をジャッジする妻の像がよりはっきり見えてくる。

参考文献

- 阿部公彦『英語文章読本』研究社、2010年。
Carver, Raymond. *Cathedral: Stories*. Vintage Contemporary Edition. New York: Vintage, 1989.

カーヴァー、レイモンド著、村上春樹編・訳『Carver's Dozen—レイモンド・カーヴァー傑作選』中央公論社、1997年。
越川芳明、柴田元幸他編著『世界×現在×文学—作家ファイル』国書刊行会、1996年。

諏訪部浩一編著『アメリカ文学入門』三修社、2013年。
平石貴樹、宮脇俊文編著『レイ、ほくらと話そう—レイモンド・カーヴァー論集』南雲堂、2004年。

(みやもと あや)